

## 2-4. 六川家住宅

### 1) 史料から見る六川家住宅

六川家の敷地は、レジストロ中心部から西へ直線で約 10 kmの四部 437 番にある。植民地内の土地区画は、間口が 250m で奥行きが 1 kmの細長い短冊状の敷地が多いなか、六川家の敷地は西側が湾曲する道路に接し特異な敷地形状である（図 2-4-1）。この場所は、『イグアッペ寫眞帖』の地図に山寺融（やまでらとおる）と記載されているが、のちに六川氏の所有となる。また『イグアッペ寫眞帖』には、建物形状の分かる写真は掲載されていないものの、竣工した頃に撮影したと思われる古写真が残されている（図 2-4-2）。そこからは、平家建てで 2 棟の建物が直角に配され L 字形平面の入隅となる面の屋根はフランス瓦が葺かれた入母屋形状で、入隅に設けられた階段を上ると、手摺が回されたバルコニーがある。この範囲は、一段葺き下ろされた屋根となっており、その下には玄関扉を確認でき、外部の開口部にはガラス窓が建て込まれているのが分かる。



図 2-4-1 山寺融氏の所有地（『イグアッペ寫眞帖』に筆者加筆）



図 2-4-2 古写真（脇岡明美氏所蔵）

### 2) 六川家住宅の現状について

建物の南面と北面は気象上の影響からか、建具は外れ、壁は崩落している。さらに、空き家となり維持管理がなされていないためか、仕口はゆるみ、床は抜け落ちた状態で、建物が倒壊しないよう木材で一時的な補強がなされている。

ラリッサリーナガセ氏は、1970 年初期の六川邸住宅について、2 か所の建物を機械が置かれた建物でつないだ配置図を論文のなかで示している<sup>1)</sup>。1 つは西側にあり L 字型に配され現地調査を行った建物で、室内には寝室と客間に加え家事室が設けられている。そして、東側の建物には台所と風呂、寝室が設けられていたとされている。ちなみに、機械が置かれ

1) Larissa Lie Nagase "PRESERVAÇÃO DA ARQUITETURA DA IMIGRAÇÃO JAPONESA NO VALE DO RIBEIRA: INVENTÁRIO, CONSERVAÇÃO E RESTAURÃO" XII Jornada de Iniciação Científica e VI Mostra de Iniciação Tecnológica Universidade Presbiteriana Mackenzie

ていた建物の規模は約 16.5m×3.6m であるが、現状の痕跡としては基礎の一部を残すのみである（写真 2-4-2）。



写真 2-4-2 六川家住宅の現状（左：西側にある調査対象の建物、右：東側の建物）

このような状況下、実測調査と簡易的な痕跡調査に加え、古写真を用いて、六川邸の復原図を作成した。建物は、巨岩の上に建設されており室内からの眺望にこだわっていたことがうかがえる（写真 2-4-3）<sup>2)</sup>。また、建物の下を流れる水路は大きくえぐられた巨岩の真ん中を通り抜けており（写真 2-4-4）、施主のこだわりが伝わってくる。

1 階の床高は地盤面より 1m ちかく上がった位置にあることから、外周部はレンガの基礎が大きく立ち上がり、入隅部に設けられているテラスへは、階段を上がりアプローチしていたことが古写真から分かる。調査ではテラスが完全に崩壊していたが、ねじれた土台に床板



写真 2-4-3 眺望を活かした設計



写真 2-4-4 巨岩の中央を流れる水路

---

2) 脇岡明美氏(Federal Institute of Education, Science and Technology of São Paulo)によれば、六川家住宅はバーとして使用されていたという。



を受ける根太の痕跡が確認でき、竣工時の状況を把握することができた。また、建物に沿ってL字形に設けられたテラス上部の屋根も大きく崩壊しているが、入母屋屋根から葺き下ろされていたことが痕跡から確認できた。

2棟がL字形に配された建物のうち、水路上の建物は梁行 5.5m×桁行 6.4m、もう一方の建物は梁行 5.5m×桁行 7.3m である。水路上の建物は間仕切り壁によって3室に分けられており、テラスから入ったすぐの居室は約6帖で、残りの2室は約2.3帖の正方形である。

なお、水路の上にある北側の居室は、床板と壁面にタイルが張られていた痕跡が確認できた<sup>3)</sup>。

もう一棟の建物では、テラスから入ったすぐの居室が約5帖でその奥に約3帖の居室がある。北側には、幅が約1.8mの入側が設けられ、水路の上の居室へとつながる。なお、入側の東側には、その先の建物へ繋がる扉が設けられ、北側には外部への扉が設けられている。

前述の通り、床板が抜け落ちている箇所は広範囲に及ぶが、残されている床板からは畳が敷かれていた形跡は確認できなかった。なお床板の厚みは27mmで、約600mm間隔で配された丸太によって支持されていたことが確認できた。さらに、室内の天井は貼られていないが、柱の上部には、周り縁の痕跡（写真2-4-5）が確認できたことから、かつては、天井が張られていたものと言える。ちなみに、回り縁の寸法は90mmで、天井高は2.84mであった。



写真 2-4-5 天井回り縁の痕跡

小屋組みは、水路上の建物では梁が一ヶ所架けられ、それに直交する中引き梁が3本の。もう一方の建物では梁が二ヶ所架けられ、それに直交する中引き梁が1本の。梁は二重梁を基本とし、母屋と棟木の下には束が立つ。垂木は60mmの角材が使われ、勾配は5寸である。

壁は多くが崩壊しているものの、残された部分からヤシによる木舞下地に土を塗ったもので、白色の塗装がなされていることが判明した。なお、現状で確認できる範囲からは、室内を真壁造りとしているが、外観は隅柱を除き大壁造りとなっている。

---

3) 脇岡明美氏によれば、水路の上にある居室はトイレとして使用されていたという。

このように保存状態が良いとはいえない六川家住宅ではあるものの、調査の結果、架構や小屋組み、窓回りなど、当初から残されている箇所があることを確認できた。

### 3) 六川家住宅の窓枠形状

崩壊している壁面が随所に確認できるなか、六川家住宅の復原図面を作成したところ、外部に面する開口部は16ヵ所あり、そのうち8ヶ所の窓が現存していた（図2-4-3）。

ここでは、水路の上の居室に放置されている窓枠（写真2-4-6）を実測調査し、以下のような納まりとなっていることを確認した。

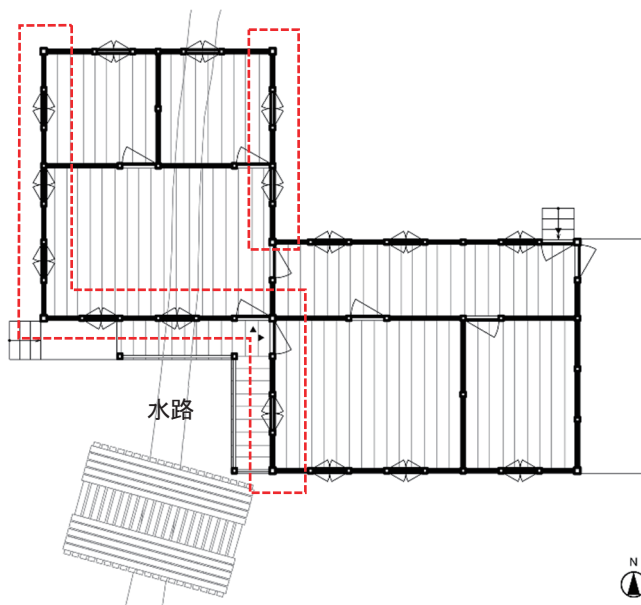


図 2-4-3 現存する窓の位置（赤色点線内）



写真 2-4-6 崩壊した窓枠

大壁造りとなっている六川家住宅の窓枠は、壁面からの散りが10mmある。窓の両脇にある柱は115mm角の正方形断面となっているが、土壁に覆われる範囲の柱は40mm削られ、見込み寸法が75mmとなっている。ここには、土を塗りつけるための、ヤシの木舞を留めた洋釘が打たれている。

楣が収まる外部のコーナー部は40mmの厚さで45°に加工されている。柱の室内側は幅100mm、厚さ15mmが欠き込まれている。楣は外側から嵌めこむように施工されており、外

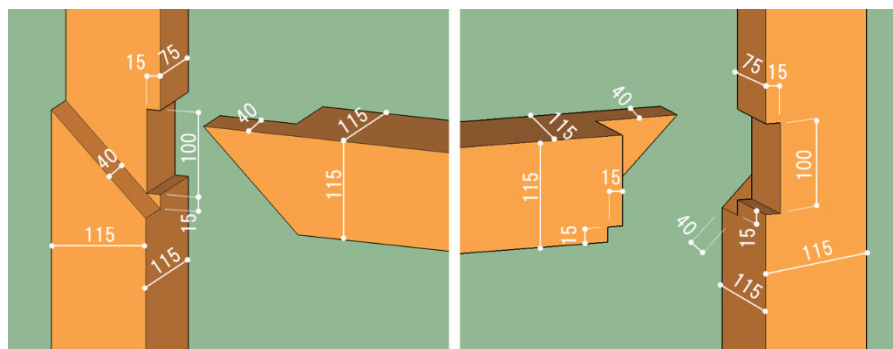


図 2-4-4 「大留め」の窓枠形状（左：外部から見た図、右：内部から見た図）



部は大留めとなっているが、室内側は欠き込まれた形状がそのまま表れている。ちなみに、へはめ込まれた楣は、上部から釘で打ち付け固定されていることを現地調査で確認し、納まりを立体的に示した（図 2-4-4）。なお、窓台については、楣と同様な形状が採用されている。

開口部の内法寸法は 1.57m×0.8m で、両開きのガラス窓に、高さ 30 cm の欄間が設けられている。なお、ガラス窓の室内側には内開きとなる板戸が建て込まれている。

これまで現地調査を実施した 6 件の住宅のうち、大壁造りで大留めを確認できた建物は、六川家住宅のほか、深澤家住宅と沖山剛造家住宅である。また、目視によって現地で確認できた中村家住宅と清水家住宅兼製茶工場でも大留めが採用されていた。これらのうち、建設年代を特定できるものは、古写真に 1936（昭和 11）年 10 月 26 日と記載のあった深澤家住宅のみである。

入植 20 年を記念して発行された『イグアッペ写真帖』には、建物や耕作地を背景に家族が集まる写真が掲載され、家族構成や入植年をはじめ、取り組んでいる事業内容が記され、当時の状況を窺い知ることができる貴重な史料であるが、そこには建物の竣工年を特定する記述はみられない。しかしながら、『イグアッペ写真帖』に掲載されている建物は発行前で、掲載されていない建物は発行後である可能性を示唆でき、文化財で大留めを採用している住宅は『イグアッペ写真帖』に掲載されていない<sup>4)</sup>。

ちなみに『イグアッペ写真帖』には、施工中の松原家住宅が掲載され、大留めの窓枠を確認できる（図 2-4-5）。撮影されたのは写真帳の発行直前であると考えられることから、窓枠のコーナー部に大留めが採用されている建物は『イグアッペ写真帖』が発行された直前の 1933（昭和 8）年頃から採用されるようになったと言える。

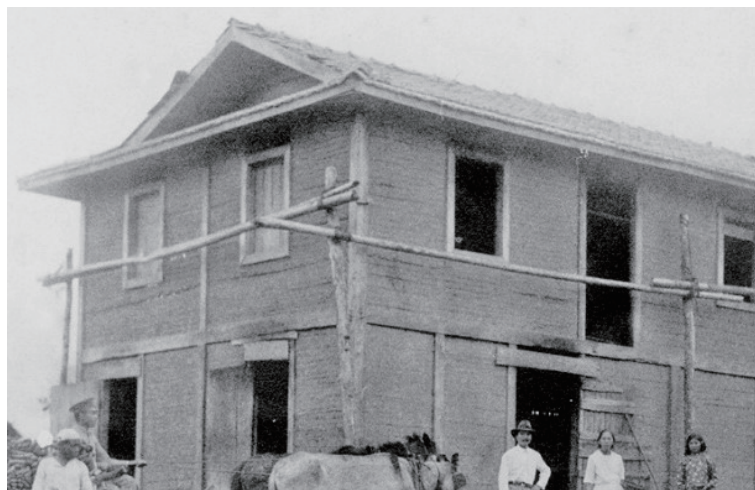


図 2-4-5 『イグアッペ写真帖』に掲載されている施工中の松原家住宅

---

4) 沖山剛造家住宅は『イグアッペ写真帖』に掲載されているが、大留めが採用されている建物は写真には写っていない。この建物は既存の小屋を解体したところへ主屋が建設された。また深澤家住宅（当初は池上熊太郎氏の所有）も同様に『イグアッペ写真帖』に掲載されているが、当該建物は写真に写っていない。この建物は既存の工場を一部解体したところへ 2 階建ての住居を新築している。ちなみに、清水家住宅兼製茶工場の竣工は『ブラジルサンパウロ州レジストロ植民地アーカイブ』によれば、1935 年頃とされている。

レジストロに残された日系移民住宅の竣工年について不確定なものが大半を占めていたが、窓枠に着目することで、建物の竣工年を判断できるきっかけとなることが分かった。

以上のことを踏まえれば、六川家住宅の竣工は 1933 年以降になると言える。また、当家の施工に携わった大工は不明だが、加工が複雑な大留めが採用されていることに加え、入母屋屋根の採用や僅かな軒反り（写真 2-4-7）は腕の立つ大工によるものと推察される。



写真 2-4-7 残された屋根より確認できる軒反り

異国の地での建設には、材料や道具の制限があり日本での作業と同じように進めることが困難な状況下において、六川家住宅の梁下端に記された「十二尺梁」の墨書（写真 2-4-8）は確かな技術を持った日本人大工の手によることを伝える貴重な証となっている。



写真 2-4-8 梁の下端に記されている墨書